

「女鳥王物語」について

武部智子

記紀の両書に記載されている恋愛物語「女鳥王物語」に登場するメドリは、非常に対照的に描かれている。この物語は三つの内容から構成されていて、それを比較しながらこの物語を考察してみたい。そこで「古事記」の全文をみてみたい。

天皇、其の弟速総別王を媒と為て、庶妹女鳥王を乞ひたまいき。爾に女鳥王、速総別王に語りて曰ひけらく、「大后の強きに因りて、八田若郎女を治め賜はず。故、仕へ奉らじと思ふ。吾は汝命の妻に為らむ。」といひて、即ち相婚ひき。是を以ちて速総別王、復奏さざりき。爾に天皇、女鳥王の坐す所に直に幸てまして、其の殿戸の闕の上に坐しき。是に女鳥王、機に坐して服織りたまへり。爾に天皇歌

曰ひたまひしく、

女鳥の 我が王の 織ろす機 誰が料ろかも

とうたひたまひき。女鳥王答へて歌曰ひたまひしく、

高行くや 速総別の 御製料

とうたひたまひき。故、天皇其の情を知りたまひて、宮に還り入りましき。此の時、其の夫速総別王到来ましし時、其の妻女鳥王歌曰ひたまひしく、

雲雀は 天に翔る 高行くや 速総別 鶺鴒取らさね
とうたひたまひき。天皇此の歌を聞きたまひて、即ち軍を興して殺さむとしまひき。

爾に速総別王、女鳥王、共に逃げ退きて、倉崎山に騰りき。

是に速総別王歌曰ひたまひしく、

梯立ての 倉椅山を 喰しみると 岩かきかねて 我が
手取らすも

とうたひたまひき。又歌曰ひたまひしく、

梯立ての 倉椅山は 喰しけど 妹と登れば 喰しく
もあらず

とうたひたまひき。故、其地より逃げ亡せて、宇陀の蘇邨
に到りし時、御軍追ひ到りて殺しき。其の將軍山部大桶連、
其の女鳥王の御手に纏かせる玉釧を取りて、己が妻に与へ
き。

此時の後、豊樂為たまはむとする時、氏氏の女等、皆朝参
りしき。爾に大桶連の妻、其の王の玉釧を、己が手に纏き
て参り赴きき。是に大后石之日売命、自ら大御酒の柏を取
りて、諸の氏氏の女等に賜ひき。爾に大后、其の玉釧を見
知りたまひて、御酒の柏を賜はずて、乃ち引き退けたまひ
て、其の夫大桶連を召し出して詔りたまひしく、「其の王
等、礼无きに因りて退け賜ひき。是は異しき事無くこそ。

夫の奴や、己が君の御手に纏かせる玉釧を、膚も焔けき刺
ぎ持ち来て、即ち己が妻に与へつる。」とのりたまひて、

乃ち死刑を給ひき。

(注二)

まず第一段。天皇の使いでやってきたハヤブサワケに對して
「仕え奉らじと思ふ」と天皇の求婚を拒否し、「吾は汝命の妻に
為らむ。」といつてハヤブサワケと結婚してしまふのである。
そして次にメドリが機を織つてるところへ天皇が「誰が料ろ
かも」と問い、それに答えてメドリは「速総別の」というので
ある。この時天皇はまだ二人の事を知らず、それゆゑ「女鳥の
我が王の」と問いかけるのである。当然天皇は「自分のも
のだ」と思つてゐるであらうし、またそういう答えを期待して
いたのであらう。ところがメドリの答えは違つていたのである。
彼女は何のためらいもなくきっぱりと「速総別」の名を告げた
のである。そして更に夫であるハヤブサワケに「天下を取つて
しまえ」と反逆をそそのかすのである。ここではメドリは、ま
ことに積極的で主体性をもつた女性として描かれていたのであ
る。この物語が、「日本書紀」では次の様に記載されている。

四十年の春二月に、雌鳥皇女を納れて妃とせむと欲して、
単別皇子を以て媒としたまふ。時に単別皇子、密に親ら娶

りて、久に復命さす。是に、天皇、夫有ること知りたまはずして、親ら雌鳥皇女の殿に臨す。時に皇女の為に織繰る女人等、歌して曰はく、

ひさかたの 天金機 雌鳥が 織る金機 単別の 御

製料

爰に天皇、単別皇子の密に婚けたることを知りたまひて、恨みたまふ。然るに皇后の言に重り、亦友于の義に敦くまして、忍びて罪せず。俄ありて単別皇子、皇女の膝に枕して臥せり。乃ち語りて曰はく、「鷓鴣と単と孰か捷き」といふ。曰はく、「単は捷し」といふ。乃ち皇子の曰はく、「是、我が先てる所なり」といふ。天皇、是の言を聞しめして、更に亦恨を起したまふ。時に単別皇子の舍人等、歌して曰はく、

単は 天に上り 飛び翔り 斎が上の 鷓鴣取らさね
天皇、是の歌を聞しめして、勃然大きに怒りて曰はく、「朕、私の恨を以て、親を失はまほしめせず、忍びてなり。何ぞ宜ますとして私の事をもて社稷に及さむ」とのたまひて、則ち単別皇子を殺さむと欲す。

時に皇子、雌鳥皇女を率て、伊勢神宮に納らむと欲ひて馳

す。是に、天皇、単別皇子逃走けたりと聞きしめて、即ち

吉備品運部雄御・播磨佐伯直阿能胡を遣して曰はく、「追ひて速かむ所に即ち殺せ」とのりたまふ。爰に皇后、

奏して言したまはく、「雌鳥皇女、寔に重き罪に当れり。

然れども其の殺さむ日に、皇女の身を露にせまほしみせず」とまうしたまふ。乃ち因りて雄御等に勅したまはく、

「皇女の前たる足玉手玉をな取りそ」とのたまふ。雄等、

追ひて菟田に至りて、素瑠山に追む。時に草の中に隠れて、

僅に免るること得。急に走けて山を越ゆ。是に、皇子、歌

して曰く、

梯立の 嶮しき山も 我妹子と 二人越ゆれば 安席

かも

爰に雄御等、免れぬることを知りて、急に伊勢の蔭代野に追ひ及きて殺しつ。時に雄御等、皇女の玉を探りて、裳の中より得つ。乃ち二の王の屍を以て、壑杵河の辺に埋みて、復命す。皇后、雄御等に問はしめて曰はく、「若し皇女の玉を見さや」とのたまふ。対へて言さく、「見ず」とまうす。

是歳、新嘗の月に当りて、宴会の日を以て、酒を内外命婦

等に賜ふ。是に、近江山君稚守山が妻と采女磐坂媛と、二の女の手に、良き珠繩けること有り。皇后、其の珠を見すに、既に雌鳥皇女の珠に似たり。則ち疑ひて、有司に命じて、其の玉を得し由を推へ問はしめたまふ。対へて言さく、「佐伯直阿俄能胡が妻の玉なり」とまうす。仍りて阿俄能胡を推へ鞠ふ。対へて曰さく、「皇女を誅しし日に、探りて取りき。」とまうす。即ち將に阿俄能胡を殺さむとす。是に、阿俄能胡、乃ち己が私の地を献りて、死罪はむと請す。故、其の地を納めて死罪を赦す。是を以て其の地を号けて玉代と曰ふ。

同じ第一段を「日本書紀」では、「時に準別皇子、密に親ら發りて、久に復命さす。」とあり、ハヤアサワケが背命したことになる。また「乃ち皇子の曰はく「是、我が先てる所なり」といふ。」とあるように、ハヤアサワケが自ら反逆を決定して、メドリの意志はかけらほども見えないのである。

歌の歌い手も「古事記」は天皇とメドリの問答形式になっているのに対し、「日本書紀」では織縷りの女性達となっている。続いて「古事記」ではメドリ自らの意見で反逆をそのかしているのに対し、「日本書紀」はハヤアサワケの舍人達が歌

っていることになっている。この様に「日本書紀」では第三者を配し、反逆に重きを置いた反逆物語としての性格を打ち出しているのに対し、「古事記」ではあくまでも主体はメドリであり、ハヤアサワケとの愛を貫いていこうとする姿を描いている。同じ伝承であるべきはずが、何故こんなにも様子を違えているのだろうか。

続く第二段では、一見してわかる様に「古事記」と「日本書紀」とでは伝承がかなり異っている。「古事記」ではハヤアサワケとメドリの逃亡が、二首の歌を中心とする前後合せてわずか二―三行の中に鮮やかに投影されている。「速総別王、女鳥王、共に逃げ退きて、倉崎山に騰りき。」の「共に」には、まるで互いに手を取って逃げて行く姿が見える様である。そしてこの二首の歌が何と効果的に二人の愛の高まりを表現していることだろうか。天皇の命に背き、追われながらも自分の意志に従って愛する夫と共に逃げていくメドリの姿が浮かんでくるようである。そして二人は殺されてしまうのである。

一方、「日本書紀」では、逃げる二人に対し天皇が「雄御」と「阿俄能胡」の二人を遣わす。その時、皇后が天皇に「雌鳥皇女、寔に重き罪に当れり。然れども其の殺さむ日に、皇女の身を露にせまほしみせず」と言うのである。そして天皇はこの

皇后の言葉に従って、二人に「足玉手玉」を取るなど命令するのである。反逆を企てた者を討とうとしている時に、皇后の言葉で情けをかけるのである。何か深い意味を持っているのであろう。続いて物語をみてみると、この二人は天皇の命令に背いて「皇女の玉を探りて、裳の中より得」るのである。そしてこの二人に皇后が「皇女の玉を見」たかと問うのである。まずまずこの部分が出来にかかっているのである。そこで「古事記」をみてみると、「大楠連」が「女鳥王の御手にまかせ玉を採取」して自分の妻に与えたと伝えている。ここでは突然「玉釧」というものが登場してくるのである。「玉釧」は、玉を緒に通し、腕や手首に巻きつける腕飾りであり、「大楠連」はメドリの美しい玉釧を戦利品として奪ってしまったのである。これは「日本書紀」の伝承とははつきり違っているところである。「日本書紀」では「皇女の齋たる足玉手玉をな取りそ」という命令に背いて着服し、嘘までついているのである。しかもそれは「玉を探りて、裳の中より得」たのである。つまりその玉は裳の中に隠されていたのである。「古事記」の「ふと見た腕にあつた美しい玉」というのは、全く意味の違ったものである。ここで注目したいのは、前述の様に命令のもとになったのが皇后の言葉であるということである。しかもそれは「皇女の身を

露にせまほしみせず」と言ったのである。ところがそれが、「皇女の齋たる足玉手玉」とか「皇女の玉」という様に限定されているということである。この第二段は、第一段のメドリ争いに端を発したハヤアサワケとメドリの反逆が失敗に終わったということを伝えているのである。その中に何故「玉」が取りざたされているのであろうか。この「玉」にまつわる伝承が、後日譚として第三段にみられる。

「古事記」では、豊樂の時に、「大楠連の妻」がその「玉釧」をして参内し、それを見た大后がメドリの「玉釧」であることを見破り、「大楠連」に死刑を言いわたしてこの物語を締めくくっている。一方「日本書紀」では、「稚守山の妻」と「磐坂媛」の二人が手に珠をして参内したこと。その珠は借り物であったこと。「阿俄能胡」が土地を献上することで死罪を赦免されたということ。そしてそれが地名起源説話となっているという。以上が「古事記」とは異なっている。

「古事記」で注目したいのは、第一に「大后石之日壳命」と明記されていることである。「日本書紀」には「皇后」の文字がみられるが、この皇后は「八田皇后」のこと(注二)をさしているのである。聖帝とうたわれた仁徳天皇の皇后が途中で代わっているとすれば非常に重大な事件であるにもかかわらず、ここでは

異つて伝承されているのである。第二に、イハノヒメの言葉である。これは「大桶連」を処刑する理由を述べているのであるが、西宮一民氏^(注三)はこれを、

皇后の言葉は重要である。嫉妬とか強情な性行の持主として描かれてきた皇后が、突如、理非曲直を弁えた立派な后に一変する。

連総別王と女鳥王への処断は反逆罪によるものであるが、それであつても、大桶連の行為は臣道と人道にもとり万死に価する、と裁断を下す。

その変身も、仁徳天皇の「有徳」によるものであつて、それだけ傑出した天皇にふさわしい伴侶は、また「聖后」でなければならなかつたからである。

と説かれている。「古事記」において、第一段、第二段と「女鳥王」の恋愛物語を考へてみると、この第三段の後日譚は、かなり異質なものであると思われるのである。というのも、突然の「玉釧」の登場と共に、このイハノヒメの言葉が、あまりにもとつてつけた様に思われるからである。

また「日本書紀」であるが、「玉代」という地名の起源を導くためのだけの説話とは考へられない。にもかかわらず、その中に「玉」を繰返しているのである。それを單純に数えても実に

9回も使用されているのである。メドリの恋愛物語にイハノヒメが登場する「古事記」では「玉」は4回しか使用されず、また重要視されていないのに、「八田皇后」が登場する「日本書紀」には、さも意味ありげに「玉」が繰返しいわれているのである。どうも「メドリ」と「ヤタ」と「玉」の三者は、関係があるように思えてならないのである。というのも、三者の関係が薄く思われる「古事記」の第一段においても、メドリの言葉の中に「八田若郎女」の名をみることができ、^(注四)「日本書紀」の第二段の「八田皇后」の言葉の中にメドリを思う気持ちが十分に含まれているのを読み取ることができるのである。さらに続く伝承の中で、「八田皇后」はあまりにもメドリの玉に執着していると思われるからである。それは一体何故なのであろうか。この三者にどのような関係があるのだろうか。

^(注四) 系譜によれば、ヤタとメドリはその母を同じくする姉妹である。ヤタ・メドリ姉妹と「玉」の関係は、おそらくその母系にあるのであろう。姉妹の兄、ウチノワキイラツコは、父応神天皇が異母兄の「大山守命」「大雀命」をさしおいて、皇位を継承させようと考えていた人物である。しかし父帝の死後、「大山守命」の反乱により「大山守命」が死んだ後、「古事記」では皇位の互譲が起こり、ワキイラツコは早死——「日本書紀」

では自殺——する。またヤタノワキイラツメは、仁徳天皇と愛し合いながら、イハノヒメの嫉妬にあり、「古事記」では入内できず、「日本書紀」ではイハノヒメの死後皇后となるのである。そういう意味でこの兄妹は仁徳の御代に大きな役割を持って登場してくるのである。

この兄妹の母は、「丸邇之比布礼能意富美女、宮主矢河枝比売」である。「古典集成」^(注五)には、「宮主」は宮の首長であり、巫女性を暗示する名とある。とすれば、姉妹の母は、その名が語るように、巫女であり、おそらくワニ氏の氏神と結びついていたのであろう。それが応神天皇との結婚により、氏神の巫女としての資格といったようなものを娘のヤタに譲ったのではないだろうか。そしてまたヤタも仁徳天皇の妻となった時、それを妹メドリに譲っていたと考えられないだろうか。そしてその母系の巫女に譲られ、伝えられたものこそが、「玉」であったのではないかと私は考えているのである。なるほど古代において「玉」は「魂」に通じるものであり、光輝いたり珍しいものであるほど、その威力を発揮すると考えられていた。そして巫女は皆そんな「玉」を持っていたのである。前に提示した姉妹と「玉」との関係は、まさしく巫女と「玉」の関係に相等するものであろう。

ところで、古代において朝廷は、地方豪族を支配することによって統治圏を広めていった。地方豪族を支配するには、何にもましてその氏族の氏神を支配することである。それにはどうすればよいか。氏神の妻である巫女を自分の妻とすること。つまり政略結婚によって支配したのである。「矢河枝比売」はまさにそういった意味の妻であつたのであろう。その一方で氏神との結びつきを表わす「玉」は、ヤタにそしてメドリにと引継がれていったのであろう。それゆえ、それを知っている姉「八田皇后」は「玉」それもメドリの「玉」に執着したと考えられるのである。

こう考えてみる時、メドリはワニ氏の氏神に仕える巫女であり、仁徳天皇にとつては、ワニ氏を支配する手段であつたのであるまいか。つまりメドリが仁徳天皇の求婚を承知することは、ワニ氏が支配されることを意味したのであり、メドリにとっては拒否するしか、それを防ぐことができなかつたのである。この物語には、メドリワニ氏氏神の巫女という事柄が根底にあつたのではあるまいか。そして、メドリを自分の妻にできなかったという、いまは天皇の失敗談はカゲをひそめていくことになり、メドリの巫女的要素の断片のみが語られたのである。^(注六)しかし一方ワニ氏の間では、メドリは結局殺されるが、天

皇の求婚を拒否したということが、ハヤブサワケとの恋愛物語へと形を変えながら伝わったのではないだろうか。

巫女は神の妻である。しかし天皇はまた神でもある。メドリがワニ氏直系の誰かに巫女である印の「玉」を譲っていたれば問題はなかったのである。ところがメドリは「玉」を持ったままハヤブサワケと結婚したのである。「古事記」においてこの恋愛物語が特に恋愛物語として伝えられるのは、この恋が天皇（つまり神）ではないハヤブサワケとメドリ（つまり巫女）の恋であったためであろう。そしてそれが、さらに葛城氏の伝承するチハノヒメの物語と組み合されることとなり、「古事記」の第三段のように「皇后」としてのイハノヒメを存命させることとなったのであろう。

以上のようにこの「女鳥王物語」を解釈してみる時、「日本書紀」の伝承にかいま見られるメドリの巫女的要素は、まさにこの物語が「古事記」の伝承よりも古い素朴を伝承しているということを物語っていると思われるのである。

注記

注一 本文は日本古典文学大系本（岩波）「古事記・祝詞」、一日本書紀上」による。

注二 仁徳紀には、

三十五年の夏六月に、皇后磐之媛命、筒城宮に薨りましぬ。
三十七年の冬十一月の甲戌の朔乙酉に、皇后を乃羅山に薨りまつる。

三十八年の春正月の癸酉の朔戊寅に、八田皇女を立てて皇后としたまふ。

とある。

注三 新潮日本古典集成「古事記」二一七頁。 頭注。

注四 「古事記」による系譜の一部を図式化（次頁上段に掲載）しておく。

注五 注三に同じ。一八四頁。 頭注三。

注六 メドリの巫女性については、守屋俊彦氏が「女鳥王物語の原型」（「古事記研究——古代伝承と歌謡——」三弥井書店。）の中で、「機」から考察されている。その中で「天皇の地位が、その政治力や軍事力などによってきまるようになることにも、巫女の力も没落してきたのである。だが、この物語が、愛をめぐる反逆物語に変容してきた時、この物語の中で、新しい女性として再生してきたのである。」と説かれている。また、メドリと伊勢神宮との関係を述べ、「伊勢神宮」が記に欠けているという点で紀の方が古いと説かれている。

附記 本稿は昭和六十二年度古事記学会大会で発表したものである。その席上大変貴重な御教示を下さいました梅沢伊勢三・西宮一民・鈴鹿千代乃・松前健・八木毅・田中卓・神田典城各氏（御教示順）に感謝致します。

系譜

応神天皇

品陀真若王

高木之入日壳命

額田大中日子命

大山守命

伊弉之真若命

大原郎女

高目郎女

中日壳命

木之荒田郎女

大雀命 (仁徳天皇)

根鳥命

弟日壳命 (略)

九邇之比布礼能

意富美

宮主矢河枝比壳

宇遲能相紀郎子

八田若郎女

女鳥王

桜井田部連祖

島垂根

糸井比壳

速総別命

(二線は婚姻関係を示す。)